採　種　ほ　産

消毒種子の取扱い

対象病害虫

- ばか苗病
- ごま葉枯病
- いもち病
- もみ枯細菌病
- 褐条病
- 苗立枯細菌病
- イネシンガレセンチュウ

◎消毒種子とは、薬剤が吹付け処理された種子で、浸種後に消毒効果が現れます。
◎モミガード C・DF とスミチオン乳剤の混合吹付け処理がされています。
◎着色ムラが見られることがありますが、薬剤の効果に影響はありません。
◎**必ずハト胸状態を確認して播種して下さい。**

採種ほ産種子の「消毒」から「播種」までの手順

日程	1～3日目	4～14日目	催芽	播種
作業の内容と方法	種子消毒のための浸種 催芽のための浸種	催芽のための浸種 （吸水）		
	種子1kgに水4ℓ、3日間は水の交換をしません（薬効）	水の交換を適時静かに行います		
	←積算温度 100～135℃（品種により異なる）→ 品種別の浸種積算温度及び日数（水温10℃の場合）		28～30℃で15～20時間（にじのきらめきについては24～32時間）加温し、ハト胸状態にします	乾籾160g/箱（催芽200g/箱）前後で播種厚播きを避けます

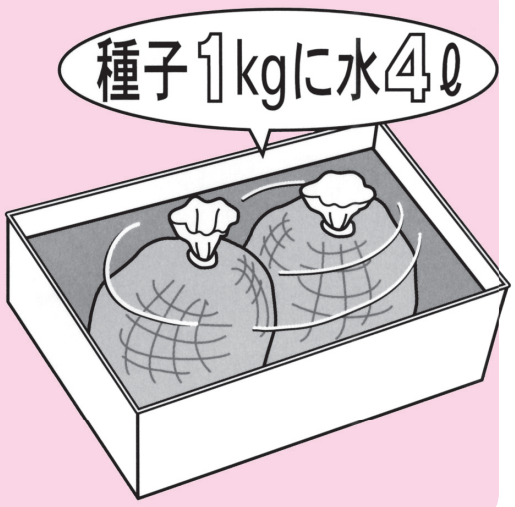
品種	浸種積算温度	日数
コシヒカリ ふくまるＳＬ	120℃	12日以上
にじのきらめき	120～135℃	14日以上
あきたこまち マンゲツモチ	100℃	10日以上

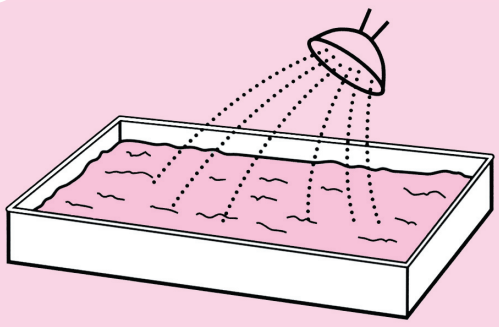
※種子休眠が深い場合は、上記日数より浸種を1日以上多くしてください。
※種子休眠が深い場合、通常より催芽に時間がかかる場合があります。ハト胸になったことを必ず確認して播種してください。

ハト胸状態

1 浸種催芽作業

1. 消毒吹付籾を3日浸種する間に、薬剤が水に溶け出し、消毒効果が発揮されます。浸種の温度が低いと消毒の効果が十分発揮されないので、薬液の温度が10℃以下にならないこと。**最初の3日間は、決して水の撹拌をしないこと。**
2. 水の交換は、4日目に第1回目を静かに行います。その後は、**発酵臭や異臭がする時は水換え**を速やかに行います。
3. 発芽の均一をはかるため水温は**10～15℃**で、積算温度100～120℃（水温10度で10～12日間）を目安に行います。水温9℃以下の日は積算しないで下さい。
4. 催芽の完了は、**ハト胸状態（芽の長さは1mm程度）**になった籾の割合を見て判断します。育苗器による出芽では5割、平置き出芽では8割以上とします。
5. ハト胸状態になっていない種子を播種すると出芽が不揃いになります。
6. ハトムネ催芽器利用時に、浮遊物が発生することがありますが、薬剤の効果や薬害の影響はありません。
7. 残った種子は、決して食用にしたり、家畜のエサに混ぜないで下さい。
8. 廃液は、河川に流さずに廃液キットの使用等適切に処理して下さい。また、消毒液の使い回しは効果がないので、決してしないで下さい。



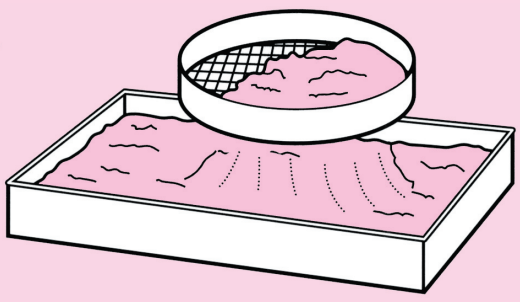


2 播種時の灌水

床土には、底から水がにじむ程度に灌水します。

3 覆土を十分に

すべての種子が覆土によって見えなくなるまでかけて下さい。覆土が薄いと根上りの原因となります。



4 出芽は適正な温度で

1. 出芽は28～30℃で行います。31℃以上の高温は、イネもみ枯細菌病等の発生原因になるので、避けて下さい。
2. 新しいビニールハウスは気温が上昇しやすいので、換気には十分注意して下さい。
3. 無加温平置出芽法では、根上がりが発生することがあります。
4. 田植えの時の苗の状態は、本葉2～2.5枚、草丈12～13cm、葉身長7～8cmが理想です。

コシヒカリ　5月5日以降の田植えで　高品質米生産を！

茨城県・(公社)茨城県農林振興公社・JAグループ茨城

R8.1